

空とぶトランク

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

むかしむかし、あるところに、ひとりの商人がいました。この人は、たいへんなお金持で、町の大通りをすつかりと、そのうえ小さな横町よこちょうまでも、銀貨でぎつしりと、しきつめることができるくらい、お金を持っていました。けれども、そんなことはしませんでした。もっとそれとはちがった、お金の使い方を知っていたのです。つまり、一シリング出せば、一ターレルもどつてくる、というようなやり方です。この人は、そういうりこうな商人でした。——そのうちに、この人は死にました。

息子むすこは、そのお金をみんな、もらいました。そして、毎日毎日、楽しくくらしていました。毎晩、仮装舞踏会かそうぶとうかいへ出かけたなり、お金の札さつでたこをこしらえたり、海へ行けば、石のかわりに、金貨で水切りをしてあそんだりしました。こんなふうでは、お金がいくらあつたところで、すぐになくなってしまいます。ほんとにそのとおりで、どんどんなくなつていきました。しまいには、とうとう、四シリングだけになつてしまいました。着るものといえば、スリッパが一足と、古い寝巻が一つあるだけです。

こうなると、友だちもだれひとり、相手にしてくれるものはありません。だって、これでは、大通りをいっしょに歩いて、はずかしくてやりきれませんからね。でも、なかに、

親切な友だちがひとりいて、その友だちが、古いトランクを送ってよこして、

「荷物でも入れたまえ」と、言ってくれました。ほんとうに、なんといつていいかわからないほど、ありがたいことでした。といつても、このトランクにつめるようなものは、なんにもありません。そこで、自分が、その中にすわりました。

ところで、これはまた、まことにふしぎなトランクでした。錠^{じょう}をおせば、このトランクは、たちまちとびだすしかけになっていたのです。ですから、この息子が錠をおすと、トランクは息子を乗せたなり、ヒューツ、と、えんとつの中をつきぬけて、高く高く雲の上までとびあがってしまったのです。そして、なおも、さきへさきへと、とんでいきました。

ところが、そのうちに、トランクの底のほうで、ミシミシいう音がしてきました。商人の息子は、トランクがこわれてしまうのではないかと、びくびくしました。そんなことにもなれば、きつと、みごとなトンボ返りをやってのけるでしょうからね。こりやあたまらん！

ところが、そうこうしているうちに、トルコ人の国へやってきました。息子は、トランクを森の中の枯れ葉の下にかくしておいて、町へ出かけました。寝巻に、スリッパという

姿で。なぜって、トルコ人はだれもかれも、息子と同じように、寝巻を着て、スリッパをはいて、歩いていましたから。そのうちに、赤ん坊をだいた乳母^{うば}に、出会いました。

「もし、トルコの乳母さん！」と、商人の息子は言いました。「あの町のすぐそばの、ほら、あんな高いところに窓のある、大きなお城は、いったい、どういうお城ですか？」

「あそこには、王さまのお姫さまが、住んでいらつしやるんですよ」と、乳母は言いました。「じつはね、お姫さまは、好きな人のために、たいそうふしあわせになるという、予言^{よげん}があるんです、ですから、王さまとお妃^{きさき}さまがいらつしやる時でなければ、だれも、お姫さまのところへ行くことができないんですよ」

「ありがとうございます」と、商人の息子は言いました。それから、森の中へもどって、トランクの中にはいりました。そうして、お城の屋根の上へとんでいって、窓からお姫さまの部屋の中へもぐりこみました。

お姫さまは、長椅子^{ながいす}に横になって、眠っていました。見れば、たいへん美しい方でしたので、商人の息子は、どうしてもキスをしないではいられなくなりました。お姫さまは、目をさまして、びっくりぎょうてんしました。でも、息子が、ぼくはトルコの神さまで、いま空をとんできたところです、と、言うとき、お姫さまは安心しました。

そこで、ふたりは、ならんで腰をおろしました。息子は、お姫さまの目についてお話をしました。お姫さまの目は、なによりも美しい、黒い湖で、そこには、考えが人魚のように泳いでいます、と、ほめました。つづいて、息子は、お姫さまのひたいについてお話をしました。お姫さまのひたいは、このうえもなく美しい広間や絵を持った、雪の山です、と、ほめたたえました。それから、かわいい、小さな赤ちゃんを連れてくる、コウノトリについてのお話もしました。

どれもこれも、ほんとうにすてきなお話でした。それから、息子は、お姫さまに結婚してください、と、言いました。すると、お姫さまは、すぐに、はい、と、答えました。

「では、今度の土曜日に、ここへ来てくださいませね」と、お姫さまは言いました。「そのときには、王さまとお妃さまとが、あたしのところへおいでになって、お茶を召しあげられますの。あたしがトルコの神さまと結婚するということを、おふたりがお聞きになれば、きっと、ずいぶんご自慢になさるでしょう。でもね、そのときも、ほんとにおもしろいお話をしてくださいませね。おとうさまも、おかあさまも、とってもお話がお好きなんですよ。おかあさまは、道徳的な、じょうひんなお話が好きですわ。だけど、おとうさまは、聞いている人が、ふきだしてしまうような、おかしいお話が好きですの」

「ええ、それでは、結婚の贈り物には、お話だけを持ってくることにします」と、息子は言いました。

それから、ふたりは、別れました。その別れぎわに、お姫さまは息子に、金貨のちりばめてある、サーベルをおくりました。これは、息子にとって、とくべつ役に立ちました。さて、息子はとんで帰りました。そして、新しい寝巻を買い、森の中にすわって、お話を考えました。そのお話は、土曜日までに、作りあげなければなりません。ところが、いざ考えはじめてみると、どうしてどうして、やさしいことではありませんでした。

それでも、息子はどうにか、お話をつくりあげました。こうして、土曜日になりました。王さま、お妃さま、それに宮廷じゅうの人々が、お姫さまのところでお茶を飲みながら、息子の来るのを、今か今かと待っていました。息子は、たいそうていねいに、むかえられました。

「では、お話をしてください」と、お妃さまが言いました。「深い意味があつて、ためになるようなお話をね」

「だが、笑いださずにはいられんようなのをな」と、王さまが言いました。

「よろしゅうございます」と、息子は言つて、話しはじめました。ひとつ、みんなで、こ

のお話を聞くことにしましょう。

「むかしむかし、一たばのマツチがありました。このマツチたちは、家がらがよかつたものですから、それを、たいそう自慢にしていました。その、もとの木というのは、マツチの小さなじく木が生れてきた、大きなマツの木のことなのです。それは、森の中の、大きな古い木でした。このマツチたちは、いま、たなの上で、火打箱ひうちばこと古い鉄なべとのあいだに横になって、自分たちの若いころのことを話していました。

『そう、ぼくたちが、緑の枝の上にいたときは』と、マツチたちは言いました。『ぼくたちは、ほんとうに、緑の枝の上にいたんですよ。あのころは、毎朝毎晩、ダイヤモンドのお茶がありました。もつとも、それは、露つゆのことですがね。お日さまが照っているときは、一日じゅう、お日さまの光をあびていましたよ。小鳥たちは、みんな、いろんな話を聞かせてくれましたつけ。それに、ぼくたちはお金持でしたよ。なにしろ、かつよう樹たちなんかは、夏のあいだし、着物を着ていられないんですが、ぼくたちの家族ときたら、夏でも冬でも、緑の着物を、ずっと着ていることができたんですからね。

ところが、そこへ木こりがやってきたんで、大革命が起ったってわけですよ。それで、ぼくたちの家族は、ちりぢりばらばらになってしまったんです。いちばんのほんけ本家は、船の

メインマストになりました。その船は、世界じゅうを航海しようと思えば、航海できるくらい、りっぱな船なんですよ。ほかの枝も、それぞれ、別の地位につきました。ところでぼくたちは、こうして、下の階級の、一般の人たちのために、火をつけてあげる役目を持つているんです。まあ、こういうようなわけで、ぼくたちみたいな上の階級の人間が、こんな台所にやってきたんですよ』

『ぼくは、そんなのとは、ずいぶんちがつてるよ』と、マツチたちのそばにいた、鉄なべが言いました。『ぼくは、世の中に生れてくると、すぐつから、何度もみがかれたり、煮^にられたりしたんだよ。ぼくは、長持ちするようにと、そればかり、心にかけているんだ。ほんとのことを言えば、この家では、ぼくが第一番のものさ。ぼくのたつた一つの楽しみは、御飯^{ごはん}のあとで、気持よくさっぱりとなつて、たなの上にすわり、仲間の者とおもしろいおしゃべりすることだよ。けれど、手おけくんだけは、ときどき中庭へおりていくから、別としても、ぼくたちはいつも、家の中でばかり暮している。ぼくたちにあたらしいニュースを持つてきてくれるのは、市場に行く手かごくんだけなんだ。ただ、このひとは、政治とか人民のことを話しだすと、ひどく過激になつてしまふがね。まったくのところ、ついこのあいだも、年とつたつぼが、その話を聞くと、びっくりして、ころがり落ちて、

こなごなになってしまったしまつだよ。あのひとは、危険な考えをもった人だ!』

『おまえさんは、すこし、しゃべりすぎるよ』と、火打箱が言いました。そして、火打がねを火打石に打ちつけたので、火花がとび散りました。『ひと晩を、ゆかいにすごそうじやありませんか?』

『それがいい。じゃ、だれが、いちばんじょうひんか、それについて話しようよ』と、マツチたちが言いました。

『いいえ、あたしは、自分のことを話すのなんか、いやですわ』と、土なべが言いました。『どうでしょう、それよりも今夜は、なにか、よきようでもなさって! あたしが、はじめに、なにかお話ししましょう。みなさん、ご経験になったことですわ。それなら、みなさん、よくご存じのことですし、たいへんおもしろいと思いますの。バルト海のほとりの、デンマークの、ブナの木の森のそばに——』

『すばらしいはじまりだなあ!』と、お皿^{さいら}たちが、口をそろえて言いました。『これは、きつと大好きなお話になるよ』

『で、あたしは、ある静かな家庭で、若いころをすごしました。その家では、家具はきれいにみがかれて、床^{ゆか}はていねいに洗われておりました。そしてカーテンは、二週間めごと

に、あたらしい、きれいなのに、取りかえられたものです』

『きみの話は、なんておもしろいんだろう！』と、ほうきが言いました。『話しているのが、女のひとだつてことは、すぐわかるよ。話を聞いてると、どこことなく、清らかなものがある』

『まったく、だれでもそう思うよ』と、手おけが言いました。そして、うれしくなつて、ちよつとはねあがつたものですから、床の上に、ピシヤツと、水がこぼれました。

土なべは話しつづけました。そして、終りのほうも、はじまりと同じように、すてきでした。

お皿たちは、みんなよろこんで、ガチャガチャ言いました。ほうきは、砂穴から緑のパセリを持ってきて、それで花輪のように、土なべをかぎりました。こんなことをすれば、ほかのものをたちを怒^{おこ}らせることはわかりきっていたのですが、おなかの中で、『きょう、ぼくがあの一とを飾^{かざ}つてあげれば、あしたは、あの一とがぼくを飾^{かざ}つてくれるだろう』と、こんなふうに、ほうきは考えたのです。

『じゃ、あたしは踊りましょう！』と、火ばしが言つて、踊りだしました。おや、おや！
どうして、あんなに片足を高く上げることができるのでしょう。むこうのすみにあつた、

古い椅子カバーが、それを見ると、思わず、ほころびてしまいました。『あたしも、花輪で飾っていただけるの?』と、火ばしは言いました。そして、そのとおりに、飾ってもらいました。

『まったく、つまらん連中ばかりだ!』と、マツチたちは思いました。

今度は、お茶わかしが、歌をうたう番になりました。ところが、お茶わかしは、あたしは、いま、かぜをひいていますし、それに、煮たっている時でなければうたえません、と、申しました。でも、それは、ただおじょうひんぶつて、そう言っているだけでした。つまり、ちゃんとご主人たちのいるテーブルの上でなければ、うたいたくなかったのです。

窓のところに、女中さんが字を書くとき、いつも使っている、古ペンがすわっていました。このペンについては、とくべつ取りたてて言うこともありませんでしたが、ただ、インキつぼの中に深くひたっていました。そして、それを、自慢に思っていました。

『お茶わかしさんが歌をうたいたくないのなら、それでもいいじゃありませんか。おもてのかごの中には、歌をうたえるナイチンゲールがおりますよ。といっても、あのひとは教育はないんですがね、でも、まあ、今夜は、わる口を言うのはよしでしょうよ!』

『それは、だんぜん、いけないと思うわ』と、湯わかしが言いました。このひとは、台所

の歌い手で、それに、お茶わかしとは腹はらちがいの姉きょうだい妹いだったのです。『あたしたちの仲間でもない、あんなよその鳥の歌を聞くなんて！ そんなこと、愛国的といえるでしょうか？ 市場いちばへ行く手かごさんに、きめていただきたいわ！』

『じつに、ふゆかいだ！』と、市場へ行く手かごが、言いました。『ぼくが、どんなにふゆかいか、だれにも想像できないでしょう。いったい、これが、今夜をおもしろくすごす、正しいやり方なんですかね？ もっと家の中を、きれいに、きちんとしておくほうが、ほんとうじゃないですかね？ みんな、それぞれ、自分の場所に帰るべきでしょう。ひとつ、ぼくが指図さしずをすることにします。そうすれば、すこしはよくなるでしょう』

『そうだ、ひとさわぎ、やらかしましよう！』と、みんなが、口々に言いました。そのとたんに、ドアがあきました。女中さんがはいってきたので、みんなはしーんとして、だれひとり口をきくものはありませんでした。しかし、そこにいるおなべたちは、みんながみんな、心の中で、自分にできる力や、自分がどんなにじょうひんかということを、考えているのでした。

『そうだ、わたしがそのつもりになっっていたら』と、みんなは思いました。『きっと、おもしろい晩になっっていたらうに！』

女中さんがマツチを取って、火をつけました。——おやまあ、マツチはパツと火花を散らして、明るく燃えあがったではありませんか。

『さあ、これでわかつたろう』と、マツチたちは心に思いました。『ぼくたちが、第一番のものだつてことが！　なんて、ぼくたちは、かがやいているんだろう！　なんという明るさだろう！——』

こうして、マツチたちは燃えきつてしまいました

「すてきなお話でしたわ」と、お妃さまは言いました。「まるで、お台所のマツチたちのそばにいるような気がしましたわ。ようございます。娘は、おまえにあげましょう」

「よろしい」と、王さまが言いました。「月曜日に、娘はおまえにやることにしよう」ふたりとも、商人の息子のことを、「おまえ」と言いましたが、この息子がもう家族のひとりになったようなつもりで、そう呼んだのです。

こうして、婚礼の式がきまりました。そして、その前の晩は、町じゅうに、あかあかと、明りがともされました。みんなは、おいしいパンやビスケットを、ほしただけもらいました。子供たちは、つまさきで立ちあがって、ばんざい、ときけんだり、指を口にあてて、口笛をふいたりしました。ふつうでは、とても見られない、それはそれはすばらしいあり

さまでした。

「うん、そうだ。ぼくもなにかやってみるか」と、商人の息子は考えました。そこで、打上げ花火やら、かんしやく玉やら、そのほか、花火という花火を買いこんで、それをトランクの中に入れて、空へとびあげました。

ポン、ポン！ と、花火は空高くあがって、大きな音をたてて、ばくはつ爆発しました。

それを見ると、トルコ人たちは、みんなびつくりして、スリッパが耳のあたりまでとぶほど、はねあがりました。いままで、こんなにすごい空の光景を見たことがなかったのです。これで、お姫さまをもらう人が、トルコの神さまだということは、だれにもよくわかりました。

商人の息子は、トランクに乗って、また森の中へもどってきましたが、すぐに考えました。「ひとつ、町へ出かけていって、みんながどんなうわさをしているか、聞いてこよう」息子がそうしたいと思ったのも、まったくむりもない話です。

いや、ところが、人々の話というのはどうでしょう！ 聞く人ごとに、めいめい、ちがったふうに見ていたのです。それでも、すばらしかったということだけは、だれの目にも、同じようにうつっていました。

「わたしはトルコの神さまを見ました」と、ひとりが言いました。「神さまの目は、キラキラ光る星のようでした。ひげは、まるで、あわだつ水のようにでしたよ」

「神さまは、火のマントを着て、とんでいましたよ」と、ほかの者が言いました。「きれいなきれいな、かわいい天使さまたちが、マントのひだの間から、のぞいていましたつけ」ほんとに、耳にはいるのは、すばらしいことばかりでした。おまけに、つぎの日は婚礼の日ときています。

商人の息子は、トランクの中へはいって、やすもうと思いながら、森へ帰ってきました。——ところが、どうしたというのでしょうか！ トランクは？ トランクはどこでしょうか？ それは燃えてしまったのです。花火の火の子が、一つのこつていて、それから火がついて、トランクは灰になってしまったのです。こうなつては、もうとぶことができません。花嫁さんのところへ、ゆくこともできません。

花嫁さんは、一日じゅう、屋根の上に出て、待っていました。いまでも、まだ待っているのです。ところで、商人の息子のほうは、世界じゅうを歩きまわって、お話をしています。でも、あのマツチたちのお話をした時のように、おもしろい話はひとつありません。

青空文庫情報

底本：「マッチ売りの少女（アンデルセン童話集※〔#ローマ数字3、1-13-23〕）」新潮文庫、新潮社

1967（昭和42）年12月10日発行

1981（昭和56）年5月30日21刷

入力：チエコ

校正：木下聡

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

空とぶトランク

ハンス・クリスチャン・アンデルセン Hans Christian Andersen

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>